『パイドン』におけるヌース原因説とイデア原因説

岩田 直也（名古屋大学）

『知と不知』の「あとがき」において松永は、次のように述べている（p. 278）。「本書の第四章となった「イデア原因説」にかかわる論考については、いまは、この論考の終わりの箇所に書かれた問題、すなわち真正の「ヌース原因説」といえる地平がいったい如何なる仕方で拓かれてくるのかという問題を、筆者はいまもそのまま保ちつづけているという以外には語りようがないのである。」この第四章の論考は、1966 年 1 月に『九州大学文学部創立四十周年記念論文集』に掲載された「或る出発点のもつ思考－プラトン『パイドン』95E–105C 注釈－」を再録したものである。著者の九州大学におけるキャリアの最初期に書かれ、その最後まで関心を持ち続けたと述べられるこの問題について、著者の思考の軌跡をここで振り返ってみることにしたい。

その主な理由は、筆者が近年発表した論文（'Socrates' First Voyage in the *Phaedo*', *History of Philosophy & Logical Analysis* 24(2), 2021, 243–67）において同一のテーマを扱ったからである。そこで私は、イデア原因説は、ヌース原因を発見するための媒介の働きをなす、ということを論じた。この論点は、イデアによる諸事象の因果説明が〈善〉概念に基づく目的論的な説明とどのように関わるのか、という問題に焦点をあてる先行研究に対して、かなり野心的な主張であった。しかし今回松永の論考を検討するにあたり、もちろん細かな論点は異なるが、筆者の論考と近しいヌース原因説への回帰という問題意識を発見し大変興味深かった。本稿では、そこでの私自身の解釈も踏まえながら、松永のこのトピックに関する論述を検討することにしたい。

まず、前半部では、『知と不知』第四章第四節「ヌース原因説とイデア原因説の差異」（pp. 87–96）における論考に焦点を当てて論じる。後半部では、続く第四章第五節「「第二の途」としてのイデア原因説の留保するもの」（pp. 96–103）について論じる。

1. ヌース原因説とイデア原因説の差異

『パイドン』95e–96a においてソクラテスは、「それぞれのものの原因を知ること、すなわち、それが何によって生じ、何によって滅び、何によって存在するのか、ということを知ることは、私にとって素晴らしいことだと思われた」と語る。そして、その原因についての自らの探求の経験を披露する仕方で、自然学者達による機械的原因説（96b–97b）、ヌース（知性）原因説（96b–99d）、イデア原因説（99d–102a）という三つの原因説を紹介している。ソクラテスによれば、機械的原因は諸事象を適切に説明できるものではないため、アナクサゴラスが主張するヌース原因を求めたが、彼やその他の人々そしてソクラテス自身もそれを発見できなかったので、「第二の航海」としてイデア原因に辿り着いた。それでは、いったいいかなる理由で機械的原因説に対してソクラテスが不満をもち、その不満をヌース原因説およびイデア原因説によって解消しようとしたのか。この問題は、周知のように、プラトン解釈の中でも最も論争的なものの一つである。ゆえに、細部における意見の相違は避けら

れないものの、筆者は次に述べる松永の基本的な解釈方針に同意する[1]。

松永によれば、ここでの焦点は「偶然性に原因を帰することの拒否」という問題にある（p. 89）。例えば、ソクラテスは、一つのものが一つのものに加えられる場合、その付加によって二つのものが生じるとは驚きだと述べているが（96e–97a）、その理由は、この「近くに置く」という物質的な操作によっては、二つのものが生じるという事象を十分根拠づけることができないからである[2]。というのも、それぞれのものを近くに置くことがなくてもそれらを二つとみなすことができるし、近くに置いたとしてもそれぞれを一つと数えることもできる。また、ソクラテスが続いて不満を述べるように、一つのものを二つに「分割する」すなわち「引き離す」ことによっても二つになることができるのである。それゆえ、付加や分割という操作それ自体は、何かが二つとなるという事象を根拠づけるものではなく、そこに二が生じたのであれば、それはそれがたまたま生じたに過ぎない。そのようにしてソクラテスは、機械的原因は特定の諸事象を必然的な仕方で引き起こすものではないため、その種の原因の考察をひとまず放棄することにしたのである。

それでは、この機械的原因説の問題を、ヌース原因説およびイデア原因説はどのように解決しようとしたのだろうか。その骨子は、松永によれば以下のようになる（p. 90–91）。まずイデア原因説から述べれば、例えば、何かが二つになるのであれば、その原因は〈二〉のイデアを分有することである。この場合、〈二〉のイデアを分有するものは、それがそのイデアを分有する限り、必ず二つのものになるのであり、先の機械的原因のように、原因とされるものがありながらその結果が生じないということはあり得ない。したがって、原因と結果の関係が偶然的でしかない機械的原因説の問題を解消できる。次に、ヌース原因については、何かが二つのものになることの原因は、それが最善であることである。この場合も、それぞれのものにとって最善であることは一つに決まるのであり、あるものが二つになるのであれば、それは三つや一つになるよりもより善かったのである。したがって、ヌース原因によっても結果は必然的に引き起こされることになる。

ここにおいてイデア原因説とヌース原因説の相違点が浮かび上がる。つまり、イデア原因説の要点は、「何かが二つになる」という事象が成立する場合に、その原因が〈二〉のイデアを分有することである、と説明することにある。しかし他方、ここでそもそも「何かが二つになる」のは何故かという問題に答えるものではない。すなわち、〈二〉のイデアは、何かが三つのものではなく二つのものになるのは何故か説明することはできず、それがたまたま二つのものになる場合に、その因果説明として参照されるものなのである（cf. アリストテレス『形而上学』A9. 991b3–5，『生成消滅論』B9.

---

[1] 松永は先立つ第一節において、原因と結果には一対一の対応がなければならないように論じているが（p. 64–65）、筆者はこの点には同意はできない。松永の主張の根拠は、ソクラテスによる「付加と分割どちらによっても二つのものが生じること」（97a）と「同じ頭によってある人は大きく、その他の人は小さくなること」（101a）への困難の言及である。しかし、少なくとも後者については、ソクラテスが真剣に考えていた問題とは思われない。というのも、ヌース原因が、ある惑星を「より速く」、その他の惑星を「より遅く」動くよう秩序づけた（98a）というように、彼の理想とする原因が正反対の結果を引き起こす状況が容易に想像できるからである。。

[2] Cf. 藤澤令夫（1996）「『パイドン』における自然哲学への出発とイデア原因論：反プラトン的解釈の徹底追及を兼ねて」『西洋古典学研究』第 44 号, 13； Rowe, C. J., (1993), *Phaedo*, Cambridge University Press, Cambridge, 231–3.

335b9–29）。これに対して、ヌース原因に基づけば、それぞれのものは最善の仕方で秩序づけられるのであるから、何かが三つではなく二つでなければならないのは何故かというその事象が成立する理由についても「それが最善であったから」という仕方で説明が与えられることになる。したがって、ヌース原因説はイデア原因説に比して諸事象を説明するためのより根源的な原理である、ということができる。

この点がヌース原因説とイデア原因説の差異について松永が挙げる一つ目である。しかしこの点は、アリストテレスによって既にイデア原因説に対する同様の不満が述べられているように、決して松永解釈に特有の論点とは言えない。むしろ注目すべき点は、彼自身そう明示的に論じているわけではないが、後述する三つ目の差異が一つ目の差異の論点を修正しているように思われることである。しかしその点を論じる前に、まずこの解釈に基づくヌース原因説に関する問題点を指摘しよう。ここでのポイントは、ヌース原因は、何かが三つやその他のものになるのではなく二つになるその理由を、それがそのものにとって最善であったから、と説明するものであった。しかしながら、何かが一つになったり二つになったりするような個別的事象に対して、そこに善悪の価値基準が介在していると想定することは非常に困難である。イデア原因説が適用される例として、他にもシミアスがソクラテスよりも大きくパイドンよりも小さいという事象が登場するが（102b–d）、それは当事者それぞれがそのような大きさの序列にあることが最善であったと言えるのであろうか。少なくともそのように極端な目的論的な世界観が『パイドン』のこの箇所に表明されていることのテキスト的根拠はない。

ここで注目すべきは、ヌース原因説（96b–99d）の箇所において言及される事象の特殊性である。そこで挙げられている具体例は、「大地が平たい、もしくは球状である」、「大地は宇宙の中心にある」、「太陽や月、他の星々の相対的な運航速度や回帰、その他の諸事象」、「大地が静止していること」といった天体に関する事柄である。ここでは、その前後にある機械的原因説（96b–97b）とイデア原因説（99d–102a）の箇所で挙げられたような、「あるものがその他のものよりも大きい」、「十は八よりも大きい」、「二ペーキュスが一ペーキュスよりも大きい」、「二および一が生じる」といったような事象は一切挙げられていない。したがって、これらのような個別的事象にまでヌース原因を適用し、あらゆる事象を「そうあることが最善であったから」として根拠づけるような極端な目的論をそもそもソクラテスが構想していたかは非常に疑わしいのである。

とはいえ、ソクラテス自身、ヌースが「すべてのもの（πάντων, 97c4）」の原因であり、「すべてのもの（πάντα, 97c5）」を秩序づける、ということを明言しているではないか、と反論があるかもしれない。しかし、この目的論的世界観をより十全に展開した『ティマイオス』においても、製作者（デーミウールゴス）である神が「すべてのもの（πάντα, 30a2）」をできるだけ善きものとなるように望んだ、と述べられている（cf. 68e5）。けれども、『ティマイオス』において、製作者のヌースは文字通りにこの世界のあらゆる個別的事象までも「そうあることが最善であった」として生み出すわけではないことに注意しなければならない。ティマイオスの宇宙生成神話の構成それ自体が示すように、この宇宙の生成の原因はヌースと機械的な「必然」に分けられる。（第一部（27c–47e）はヌース原因、第二部（47e–69a）は必然、第三部（69a–92c）はそれらを組み合わせた原因説明が行われる。）。そして彼はこの原因の区別について次のように述べている。

「知性（νοῦ）と知識を愛するものは、理性的な本性に属する諸原因を第一のものとして追究し、他のものによって動かされ、必然的に他のものを動かすものに属する諸原因を第二のものとして追究することが必要です。そこで私たちもこの区別に従わなくてはなりません。原因のどちらの種類も話す必要がありますが、知性をもって美しく善いものを作る製作者としての原因と、思慮を欠いてその都度偶然ででたらめな結果をもたらす原因を分ける必要があるのです。」（46d7–e6）

ここでヌース原因と対比されているものは、非理性的で物質的な性質をその本性にもち、『パイドン』における機械的な原因と同様のものと考えてよい。そして、これら二つの種類の原因は、この世界における諸事象を説明するにあたって、二者択一的な存在ではなく、共に必要であるが機械的原因がヌース原因に従属するものとして想定されていることが理解できるだろう。したがって、『ティマイオス』においてはこの機械的原因が「補助原因（συαίτιον, 46c7）」として、ある種の原因としての地位を確立するのである。例えば、人間が視覚を持つことの補助原因は、簡潔にまとめれば、目の中に太陽の光と同質の火をもつがゆえに、昼間にはその目からの火が外界に発出し、視覚対象からの火と衝突することで、その振動が目を通じて魂に伝わることで視覚が生じる、というものである（45b2–46a2）。これに対して、人間が視覚を持つことのヌース原因は、天体の運行を観測し、数と時間および万有の本性を学び哲学をすることで、各人の魂の乱れた回転運動を正常なものに立て直すことができ、それは人間にとって最善のことである、というものである（47a1–e2）。この対比から明らかなように、私たち人間は普段様々なものを見て、その視覚経験には目と外界の機械的なメカニズムが働いているが、それら個別事象の一つ一つが最善であったというような目的論をプラトンが想定していたわけでは決してない。ヌース原因は、そもそも人間が視覚というものを持って生まれているは何故か、というより大局的かつ根源的な視点で導入されているのである。

このプラトンの目的論は、ストア派のそれと似て非なるものであることが見て取れるだろう。ストア派にとってこの世界の原理は、神的理性である「作用するもの」と無規定的な素材である「作用を受けるもの」であり、これら二つの相互作用によってすべてが成り立っている（LS 44B）。ここでストア派の目的論を推進したクリュシッポスの主張は、文字通りに、あらゆる事象がこの能動原理である神の摂理によって最善の仕方で構築されているがゆえに、この世界で起きるすべてのことはあらかじめ因果の連鎖によって決定しており、さらにこの世界が消滅して新たな世界が成立するとしてもその細部は全く同じものとなる、というものである（LS 46G, 55J–Q）。このように「すべてのものを最善のものとして構築した」という主張を文字通りに受け取る限り、このクリュシッポスのような徹底的な決定論に終着せざるを得ない。これに対し、このような細部に渡る決定論的な世界観は、『パイドン』だけでなくプラトンの他の対話篇のいかなる箇所にも見られないのである。

ここで、松永がヌース原因説とイデア原因説の相違として挙げる第三の点に移ろう（pp. 93–95）。先にも述べたように、第一の点を論じるにあたって松永は、ヌース原因によって「あるものが二つになることは最善であった」という仕方で、すべての事象を〈善〉に基づいて説明する方式の可能性を

認めていた。しかし彼はこの第三の点を論ずるにあたって、この感覚世界は常に変化し続ける不定の世界であり、そのような不定の諸事象が「ヌースによって「作られたもの」であるとか、そのあり方が善によって理由づけられると解釈することは、むしろ奇怪な主張であると見做しうる」と述べている。その上で、この感覚世界にありながら不定性というより不変で恒常的な秩序をもつ「宇宙＝コスモス（秩序づけられたもの）」の存在に着目するのである。その論点は、ヌース原因が直接的に統括する事象は宇宙全体や天体の恒久的な動きなどに限られ、「あるものが二つになる」といった個別的事象については偶然性に委ねられている、というものである。したがって、ヌース原因説とイデア原因説を区別する第三の点は、前者が感覚世界を宇宙というその総体として捉え因果説明を与えるものであり、後者はその内部にあるそれぞれの事象を個々に捉えて説明を与えるもの、ということである。

松永が述べるように、ここから帰結する重要な点は、イデア原因説がヌース原因説の「第二の途」として登場する理論であるにも関わらず、この世界に因果説明を与える上でそれらが排他的な選択肢としてあるわけではない、ということである。さらに筆者の冒頭に掲げた論文の主張を付け加えて言えば、当初放棄された機械的原因説についても、決してそれをヌース原因説に取って替えることをソクラテスが目的としていたのではない（Iwata, 253–255）。ゆえに、この箇所についてよく語られる、機械論的な因果説明の方式を捨てて、目的論的な因果説明の方式を採択したなどという単純な図式は決して正確ではないのである。先の『ティマイオス』における引用では、宇宙論を展開する際に、ヌース原因と機械的な補助原因どちらも追究する必要があると語られていた。この点について、ティマイオスはさらに次のように述べている。

> 「それゆえ、必然的な種と神的な種の二種類の原因を区別しなければいけません。神的な種の方は、幸福な生を手に入れるために、私たちの本性が許す限りあらゆる場合に探求する必要があります。また、必然的な種の方も神的な原因のために探究する必要があるのです。その理由は、必然的な原因なしに、私たちが真剣になる神的な原因自体をそれだけで認識することも、手に入れることも、他のどんな仕方でも分け持つことができないからと考えてのことなのです。」（68e6–69a5）

ここで神的な原因と必然的な原因は、ヌース原因と機械的な補助原因と考えてよい。するとこの箇所では、両原因を探究することの必要性に加えて、ヌース原因がそれだけで直接探究されうるものではなく、機械的な原因の探究がヌース原因の探究のための必要不可欠な媒介となる、と語られていることになる。『パイドン』においても、『ティマイオス』程明示的ではないが、まず機械的原因を把握したうえで、それに基づきより根源的なヌース原因を、というこの探究の序列関係はすでに示唆されている。ソクラテスがアナクサゴラスに期待したことは、例えば、大地が平らであるか球形であるかまず（πρῶτον）述べたうえで、そのうえでなぜそれが最善であったのか説明することであった（97d6–98a2）。確かに、アナクサゴラスやその他の自然学者たちは、結局、知性原因ではなく機械的原因を追究しているという理由で、ソクラテスに批判されている。しかしながら、その批判の要点

は、機械的原因を追究していることそれ自体ではなく、真なる原因と「それがなければ原因が決して原因とならないもの」を区別していないことなのである（99b2–4）。つまり、機械的原因を探究しながらも、それが結果の生じるうえで単なる必要条件でしかないことを認識せず、そこから真の原因であるヌース原因の探究に向かわないからこそ批判の対象になっているのだ。最終的な目標をヌース原因の探究に据える限り、機械的原因を探究することはそれに反する行為なのでは決してなく、むしろその目標への礎となる、という主張を『パイドン』のこの箇所に読み取ることはそれほど困難ではないだろう。

では、いかにして機械的原因の把握はヌース原因の把握に役立つのであろうか。ソクラテスの期待によれば、ヌースはこの世界のあらゆるものを最善のものとして構築した第一の原因である。しかしこのことは、先にも述べたように、この世界における個別的諸事象すべてまでを最善の状態になるよう秩序づけることでは決してない。『ティマイオス』における宇宙生成神話に依拠すれば、神である製作者はこの宇宙全体が最善のものとなるように構築したが、その個別的諸事象についてはその生成・消滅および存在の原理を機械的で必然的である補助原因に委ねている。したがって、それらの一つ一つが、宇宙全体のあり方から切り離された仕方で、可能な限り最善の仕方であるわけではない。その事象だけを取り出してみれば、もちろんむしろ悪いものとしてあるように思われる場合は多数存在する。例えば、そもそも人間に欲望的部分がなければより善かっただろうし、病気なども存在しなければより善かっただろう。ただし、それら個別的諸事象も、最終的には、ヌースによる〈善〉原理に何らかの仕方で支えられているのである。それゆえ、私たちは、この世界における諸事象のメカニズムを探究することで、そこに秘められた〈善〉の概念に接近していくことができる。しかしその仕方は、決して諸々の諸事象それぞれが何故そうなっているのかという個別的な仕方ではなく、それらが全体として何故そうなっているのかという総合的な仕方でなければならない。そして、そのような大局的な思考が特に必要とされる場面として、この宇宙の主要な構成要素であるこの大地や諸々の天体の諸性質が挙げられる。したがって、とりわけそれらを考察することによって、ソクラテスが〈善〉の本性を学ぶことができると想定したことも当然だろう。そしてその方法は、まず天体の配置や運動などの諸性質についての事実関係を機械的原因を踏まえた上で突き止めたうえで、何故それがそうなっている必要があったのかという理由を探るというものなのである。

以上がソクラテスによるヌース原因説探究の「第一の航海」である。しかしながら、『パイドン』においては、この探究が失敗に終わったことが告げられる。そして、その代わりに「第二の航海」としてイデア原因説が導入されるのである。そこで次節においては、冒頭において松永が問題意識を持ち続けていると述べた、ヌース原因説とイデア原因説の関連性をヌース原因の探究という側面からさらに考察してみたい。

2. 「第二の途」としてのイデア原因説の留保するもの

（つづく）